

# 木曾川



木曾川文庫は治水の資料館。  
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、  
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。  
秋号では木曾谷の南の玄関口、中津川市山口・馬籠から、  
その歴史や砂防事業を中心に、  
歴史ドキュメントでは、近世の御手伝普請を特集します。



岐阜県中津川市山口・馬籠地区

ふるさとの街・探訪記

## 農業と宿場町を中心に 歴史を重ねた、山口・馬籠

エリア・レポート

地域社会の未来を創る砂防事業と橋梁整備

気ままにJOURNEY

## 文人墨客たちの 心のふるさとを歩く

歴史ドキュメント

御手伝普請の変遷とその特性

TALK&TALK

木曾三川の流れとともに

民話の小箱

竜宮乙姫岩の伝説



# 農業と宿場町を中心に 歴史を重ねた山口・馬籠

平成一七年二月長野県山口村は岐阜県中津川市と合併し中津川市山口・馬籠として新たな歩みを踏み出しました。山口・馬籠は、木曾谷の南玄関(律令時代)木曾谷を北上する岐蘇山道が整備された頃から次第に住民が定着していったようです。山口は木曾谷随一の米の生産地でした。馬籠は中山道六九宿の一つ馬籠宿として発展。現在は国道一九号が山口地内を北上、交通の要路として重要な役割を担っています。

## 山口・馬籠のあらまし

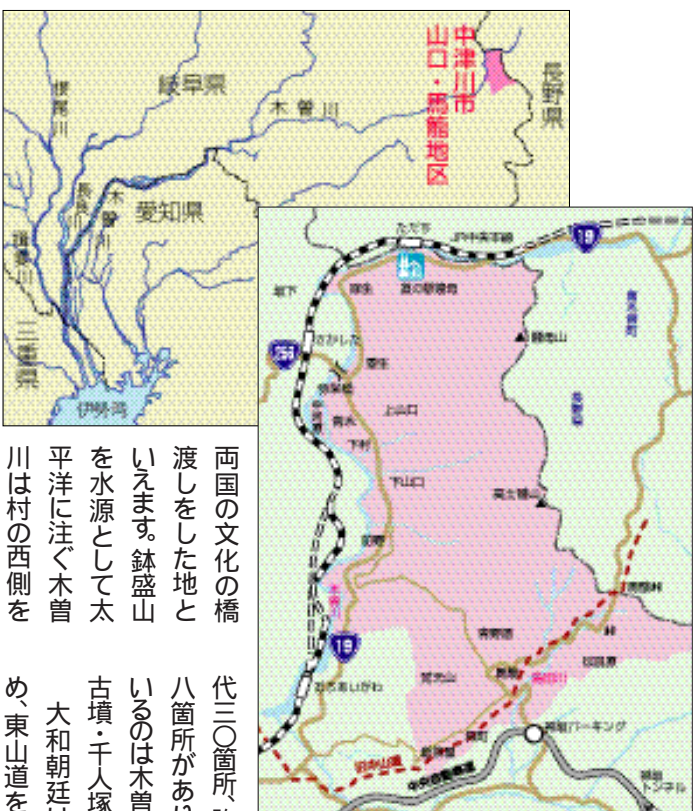
平成一七年二月、長野県山口村は県境を越えて中津川市と合併しました。山口・馬籠は木曾谷に入る入口にあり、まさに平野部から山地へ入る山の口の村でした。信濃国と美濃国の境をなし

流れ、東日本系・西日本系の文化圏の接点の一つとなっています。

集落は山口地区と馬籠地区に大別されます。山口地区は木曾川左岸の段丘上に点在し、馬籠地区は、馬籠・峠・荒町の三つが中山道に沿って集落を形成しています。温帯と暖帯が接する気候により豊富な植生に恵まれています。年平均気温も一三・五度と比較的溫暖で降雪も少ないことから農業を中心に成長し、近年までは米と繭が主要産物でした。

## 太古の山口・馬籠

先史時代の遺跡は、先土器時代一箇所、縄文時代三箇所、弥生時代五箇所、古墳時代八箇所があります。古墳が発見されているのは木曾谷では山口だけで、山ノ神古墳・千人塚古墳の二つがあります。大和朝廷は、東国への勢力伸張のため、東山道を開いています。木曾路の起



源は東山道ですが、美濃から信濃へ通じるこの道には最大の難所、神坂峠(現長野県下伊那郡阿智村)が控えていたため、八世紀初めには馬籠妻籠(御殿二留野)と川と木曾谷を北上する岐蘇山道を開き、以後、両ルートが使われるようになりました。馬籠は東山道の周辺村落として開けはじめ、岐蘇山道開通の頃より次第に住民が定着していったようです。

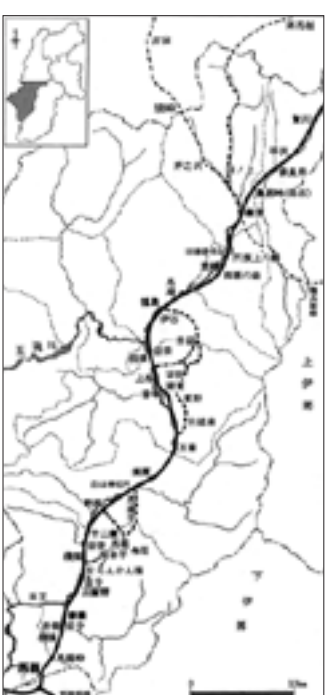


縄文後・晩期の川原田B遺跡から出土した遺物

律令制下の山口・馬籠は美濃国恵那郡に属していたと推定されます。

## 木曾氏と島崎氏

戦国時代になると、木曾氏が勢力を伸ばして木曾地方を領有し、一時は東濃地方まで勢力を拡大。甲斐を中心



岐蘇山道推定路(長野県史より)

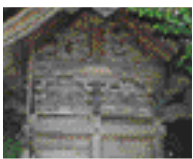
に勢力を伸ばしていた武田信玄は娘を木曾

義昌に嫁がせ木曾への進出を目論み、一方、美濃を本拠に木曾の覇権を狙う織田信長も木曾氏との接触を図ってきました。しかし長篠の合戦(天正三年・一五七五)の大敗で武田氏に降りが見えたと木曾義昌は織田氏の傘下へ。天正一〇年(一五八二)木曾義昌は東濃地方に対する固めとして馬籠の西方にある馬籠城を修築して、島崎監物を守将にしました。同年、本能寺の変が勃発。信長死後の覇権をめぐる天正一二年(一五八四)に小牧・長久手の戦いが起きますが、この時木曾氏の配下の島崎氏は羽柴(豊臣)秀吉方として参戦。徳川連合軍に攻められ、妻籠城へ逃れました。当時の妻籠城主は木曾氏の家臣の山村長勝。彼が率いる将兵はよく戦い、連合軍を撃退しました。こうして木曾氏は戦功を挙げましたが、秀吉は木曾義昌を追放。慶長三年(一五九八)木曾家は断絶します。

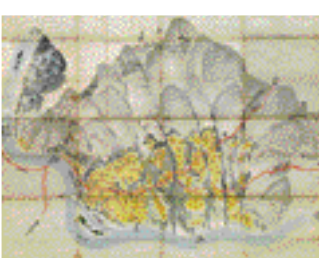
木曾氏の家臣であった島崎氏は馬籠村の開祖といえる家柄で、明治の文豪・島崎藤村の祖先にあたります。系図によると相模三浦氏の出自で、永正一〇年(一五一一)重綱の代に木曾氏に仕え、弘治元年(一五五五)妻籠に住し、永禄元年(一五五八)重通が馬籠に移って馬籠島崎氏の初代となり、二代重長は郷士となって馬籠の代官職に任せられ、九代勝房の代から本陣・庄屋・問屋を兼ねてこの地方の名家となりました。

## 木曾谷随一の米の生産地

太平の江戸の世になると、山口・馬籠は幕府領となり、元和元年(一六一五)から尾張藩領に属しました。木曾川段丘に位置する山口は気候温暖、土地も肥沃で農業が主体であったため山村ながら、山村特有の木年貢は課せられず、米年貢だけでした。当時は木曾谷随一の米の生産地であり、また紙漉職が四軒あったといわれています。



山口諏訪神社本殿



山口村絵図(江戸中期)

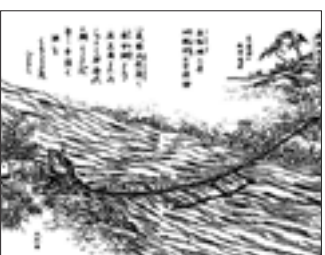
国からはきりせず、信濃国筑摩郡と確定したのは、元禄一五年(一七〇二)国絵図調査改訂の時であったといわれています。

## 大川狩と川並番所

山口地区には養蚕の渡し場や材木の川狩・夜輸送の管理や盗木を防ぐための川並番所、出水による流木を留める杭場、揚げた材木を保管する土場や綱場があり、役人の監視小屋、人足の休憩小屋が木曾川の両岸の数箇所に設置されていました。

上山口の浜居場に川並番所が置かれ、大川狩の時期になると美濃国錦織奉行所より同心役人が来て常駐しました。村では、の役人たちの宿泊接待に苦労したことが庄屋文書から知ることができま

す。また、洪水の際には材木の流失を防ぐために村民の出役が要請されました。安永六年(一七七七)の洪水



綱場

時には、一六五人が出役しています。大川狩は若倉郷川合渡、木曾福島地内(より美濃国加茂郡錦津村の錦織岐阜(八百津町)の綱場まで約二〇里を「管流」して材木を運搬する方法。その間木曾川には難所がありますが、現在の関西電力賤母発電所付近は急流で曲折し深淵をなしており、川狩人夫がたびたび溺死する危険な難所でした。寛保二年(一七四二)尾張藩は危険防止を願うこの場所に不動尊像を安置しています。このほか山口地内には三箇所に祀られたといわれますが、現存するのは賤母一箇所だけとなりました。

## 馬籠村と馬籠宿

馬籠地区の中心の馬籠村は、慶長六年(一六〇二)徳川家康が制定した中山道六九宿の一つ、馬籠宿を中心とした集落です。温暖地であったため諸作物もよく育ち、桑・楮なども収穫されたようです。馬籠村の峠集落は牛方衆と呼ばれ、牛を用いて荷物運搬に従事する者が多かったようです。彼らを木曾では岡船と呼び、遠くは善光寺まで荷送りして駄賃稼ぎしました。安政三年(一八五六)峠の牛方衆が団結して中津川の問屋・角屋



峠の集落



空から見た中津川市山口



空から見た中津川市馬籠

村ながら、山村特有の木年貢は課せられず、米年貢だけでした。当時は木曾谷随一の米の生産地であり、また紙漉職が四軒あったといわれています。この山口地区は上下二郷に分かれており、上山口の諏訪神社は慶長一六年(一六一一)の創建



十兵衛の不正に対抗しついに牛方衆が勝利しました。島崎藤村は、の史実を小説「夜明け前」に取り上げています。

馬籠宿と下川用水

馬籠宿は馬の背のような坂道の両側に家屋が立ち並んだ宿場で、木曾路最初の宿駅です。東の高札場と西の枅形の入口まで、家屋が連なる線状の集落です。その構成は現在の町並みにも残されています。

馬籠宿の唯一の用水は下川用水です。愛宕山の東方から発した一の沢・二の沢・三の沢が合流して塩沢となります。下川用水は塩沢の塩沢橋の下方中山道下辺から取水、中山道下の斜面に水路を通して宿場へ飲み水などの生活用水を送っていました。しかし、宿場裏のウバ谷などの急斜面では水路建設が不可能だったので、二町余の斜面に算樋を掛けて通水していました。ところが大雨が



馬籠下川用水の図

降ると、崖が崩れせつかくの算樋の腕木が倒れてしまい、通水が止まることもしばしばでした。そのたびに大変な修繕になり、宿場の人だけでなく馬籠村全部の人が協力して修復しました。

その被害はたびたびのことでしたから、手を焼いた宿では一計を案じ、隧道を掘り抜いて通水することにしました。天保一四年（一八四三）のことです。しかしその隧道も万全ではなく、大雨が降れば隧道は潰れ抜けて水が吹き出してしまいう有様。多額の経費をかけて修理をしてもまた潰れという状況の繰り返しで、結局また元通りの算樋に戻っていました。

水の確保は馬籠宿の宿命的な課題です。明治七年（一八七五）、ウバ谷に木樋を架設。明治一九年（一八八六）には腐朽した木樋を架替するなど、後に表川用水が整備されるまで、下川用水の維持管理に馬籠の住民は腐心してきました。

島崎正樹・広助の山林解放運動

明治政府は、新時代にふさわしい国力を確立するために地租改正をはじめ諸制度の改革を断行しました。その中でも林野制度の改革は、長い間山林に依存してきた木曾谷住民の生活を圧迫することとなりました。江戸時代尾張藩は、木曾山のうちの一部を「巢山」「留山」とし、住民の立入を禁止して樹木を保護しましたが、これ以外の山は「明山」

と称して住民の立入を自由としていました。ここで住民は家作用材・薪炭材、その他、田畑の肥料としての芝草刈りや、また山に入つて「柵・団栗・栗を拾い、生活の糧としていました。ところが明治政府は「明山」も官有地として立入りを禁止してしまつたのです。

この政策に木曾谷の住民の不満は募り、山林開放運動を展開。馬籠村の庄屋・島崎正樹は木曾谷村々の代表となり、明治四年には、明山への立入り、停止木制度の撤廃を筑摩県に嘆願しています。しかし再度の嘆願は聞き入れられず、運動の首謀者とされた島崎正樹は「今日限り戸長免職と心得よ」とされたため、正樹は失意の中で運動から身を引きました。

島崎正樹は藤村の父、代表者を失つた運動は休止しますが、その後の運動の中心人物となるのが島崎広助、妻籠本陣の養子となつた人で藤村の実兄です。広助の私財をなげつた哀願運動は明治三八年（一九〇五）御下賜金下付の決定といつ一応の解決をみました。正樹の山林解放運動より三〇余年の歳月が過ぎていました。

個性あふれる

地域づくりを目指して

国道一九号の下に広がる水田地帯。通称青木平は、明治四〇年（一九〇七）、近隣町村に先駆けて耕地整理事業が行われ米の増産が図られた地域です。

その一方交通網の整備も着々と進行し、明治三五年（一八九二）山口と三留野・長野県南木曾町を結ぶ賤母新道（後の国道一九号）が明治四四年（一九一〇）には木曾谷を通過する中央線が開通しました。中山道から国道一九号や鉄道へ。このような交通路の変遷により馬籠宿は寂れますが、昭和三〇年代から木曾路観光ブームにより、現在では年間九〇万人余が訪れる観光地に成長。こうした観光資源を生かした地域づくりを積極的に進めるとともに、野菜のハウス栽培、果樹の栽培など新しい農業生産を奨励。また、林業においては檜や杉の優良材生産の他、竹林整備によって、竹・竹炭の産地化をも計画しています。さらに生活環境面では、名古屋方面への交通の利便性の向上に伴い、若者定住住宅や宅地分譲をはじめ、各地区の実情に応じた下水道の整備などを実施。個性あふれた地域づくりを目指して、住民と行政が一体となつた多彩なプロジェクトを行っています。



若者定住住宅



まごめ浄化センター

参考文献  
『山口村誌』上下巻、平成七年

山口村誌編集委員会  
『角川地名大辞典』長野県、角川書店



# 地域社会の未来を創る 砂防事業と橋梁整備

木曾谷は土砂災害の多発地帯。山口・馬籠地区も集中豪雨により、土石流や土砂災害が発生。そのため木曾川への土砂流出の軽減を主目的に、砂防事業が実施され、近年では景観や自然環境に配慮した砂防施設が建設されました。また、蚕生の渡しから弥栄橋へ、山口と坂下を結ぶ交通の要路の変遷も紹介します。

【山口・馬籠の砂防事業】  
溪流環境と共生する山口・馬籠の砂防施設

先人の偉業が光る  
木曾の砂防事業

木曾川上流域にあたる木曾谷南部の地形は急峻かつ複雑で、その斜面や平地には集落が点在し、木曾川に沿ってJR中央本線や国道一九号が走っています。これらの地域では出水の都度土砂が流出し、災害が繰り返されてきました。明治時代、

木曾三川の改修を手がけたオランダ人技師、ヨハネス・デ・レーケもこの地を訪れたとき、その荒廃ぶりを目の当たりにして、砂防事業の必要性を力説しています。

木曾谷の入口、山口地区は木曾川に直接流れ込む急勾配の溪流が並流し、降雨のたびに土砂災害を繰り返してきた地域。分水嶺の高土幾山の裏側には、明治一三年（一八八〇）明治天皇の天覧に浴した、大崖砂防堰堤があります。デ・レーケの指導により誕生した大崖砂防堰堤は、木曾南部の砂防事業の原点です。今も脈々とデ・レーケの砂防思想は受け継がれています。

馬籠地区を襲った土砂災害

馬籠地区は馬籠宿を中心に開けた集落です。明治三七年（一九〇四）七月一日に発生した集中豪雨で、馬籠地区は多大な被害を受けました。被害は馬

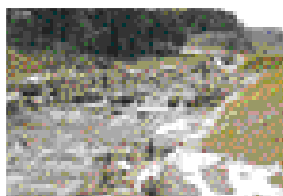
籠地区の中でも峠集落に集中。水死者四名、罹災戸数二二戸、橋梁流失一一。橋道路破壊二五ヶ所、田畑流失二〇町歩など、小さな集落が大打撃を受けました。その被害を今に伝えるのが、峠の水車塚です。碑文は島崎藤村の揮毫。「山家において、水にうもれた蜂谷の家族四人之記念に」と災害の悲劇が刻まれています。

馬籠地区の砂防事業

こうした土砂災害を防ぐため、馬籠地区では昭和二年（一九二七）から木曾川直轄砂防落合川砂防の一環として工事が開始されました。第二次世界大戦中、事業費は縮小されましたが、戦後、治山治水事業が公共事業の中心課題となり、落合川の各支川でも主要地点に砂防堰堤が施工されました。観光客でにぎわう旧中山道の南玄関・馬籠宿などの上流に砂防堰堤が完成し、土石流から貴重な文化財を守っています。また、平成二二年度には、近隣の地域環境になじむよう、景観や、自然環境に

配慮した島田川床固工群が完成しています。

島田川は馬籠峠を水源とした落合川の支川です。島田川床固工群は、河床・河岸の侵食を防止するために、島田川中流に設置されました。また、この地区では初めて階段式魚道が導入されました。床固工群の一部にイワナやヤマメなど木曾川に生息する美しい溪流魚のための通り道が設けられたのです。階段式魚道は、隔壁によって階段式のプールをつくり、これを連続させる構造で、日本の魚道でもっともポピュラーな型式です。調査では、溪流魚の遡上が確認されています。



自然環境型護岸



階段式魚道



クリートではなく、現地にある自然の転石が有効利用されています。このほか周辺では、観光客や近隣住民の憩う親水公園の整備が進められています。

山口を襲った集中豪雨の爪痕

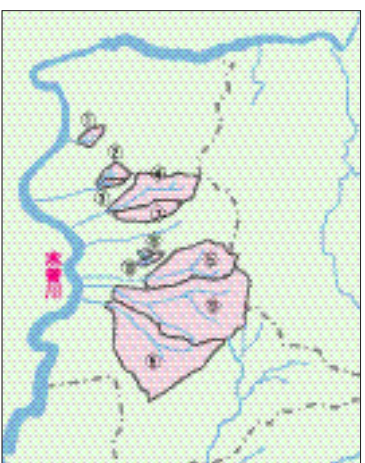
背後に高土幾山・賤母山を背負う山口地区は、これらの山を水源とする大小六つの沢が西の木曾川に向けて、河岸段丘を侵食して流れています。昭和二十八年（一九五三）七月二〇日、木曾南部を中心とした集中豪雨は、この地域の地形的特性が招く自然災害の危険性を現実のものとなりました。

この年、木曾谷は六月からの降雨が例年になく多く、地盤はゆるんだ状態が続き、河水も増水状態にありました。七月一九日から降り続いた雨は最後のトドメをさす形になり、二〇日早朝各溪流からの土石流が下流を襲いました。大又沢新梨沢橋梁をはじめ各所の橋が次々と流され、鉄道・国道を埋め、人家を壊し、通信及び交通を遮断。山口地区は文字通り陸の孤島となりました。

た。地区内の流失・冠埋没耕地は実に七二町歩に及び、中でも造成の新しい開拓地の被害は多大。南部の下山地区では作付一九町歩の耕地が傾斜地のため一三町歩にわたって耕土を流出。加えて木曾川護岸の決壊、河川護岸の流失、橋梁の陥没・流失、家屋の全壊など、被害総額は当時の額で二億円強にも及び、村の全域に悲惨な被害の爪痕を残しました。

山口地区の砂防事業

図に示すように山口地区には、土石流危険溪流が多く存在しています。その中でも大沢川・前野沢・本沢川は下流に国道一九号が通り、人家が点在している主要な区域ですが、流域の荒廃が進んでいる非常に危険な溪流です。



しかし木曾川直轄砂防工事が進む落合川流域とは対照的に、整備は遅れていました。そのため、昭和二十八年の集中豪雨をはじめ、昭和五〇年（一九七五）など災害は多発しています。

昭和五〇年七月の集中豪雨による「七夕災害」では、山口村（当時）をはじめ上松町・大桑村・南木曾町で土砂災害による大きな被害が発生しました。この災害を契機として、四町村は共同して国による砂防事業の推進を要請していきます。この時、当時の山口村は四町村の意見とりまとめに尽力しました。こうして、昭和五三年から木曾南部直轄砂防事業が開始されました。

木曾南部直轄砂防事業の基本構想は、木曾川本川への土砂流出を軽減することを基本とし、その中で、地域防災、JRR中央本線や国道一九号などの基幹交通の保護を目的としています。

山口地区では、平成二年完成の大沢川第一砂防堰堤に始まり、本沢川第一砂防堰堤前野沢第一砂防堰堤等が整備され、地域に暮らす人々の生命と財産が自然の脅威から守られています。



【山口の橋梁整備】

黍生の渡しから弥栄橋へ、山口と坂下を結ぶ要路

山口と坂下・田立間の木曾川の往来は古くから渡船に頼ってきました。

上流から麻生の渡し、黍生の渡しを経て筏渡しが行われていました。筏渡しができる場所は、流れの穏やかな砂地のある浜が適しています。

黍生の渡し場は最もよい条件を備えていたところ。山口発電所の上流約百mの位置にありました。この場所の江戸



黍生の渡し

時代の川幅は六〇間（一〇八m）、水深一丈約三mでした。

二つの渡しは濃飛街道へ通ずる重要な交通手段として往来が多くなり、江戸時代後期には舟が使われるようになりました。桶屋・鍛冶屋・石屋・医師などの往来があり、筏場の屋号を持つ家も

あります。元禄時代の宗門改の文書を見ると、山口・坂下間の婚姻が常に行われていたことがわかります。

明治時代の交通網整備

明治二四年（一八九一）岐阜県を走る国道・山口便道が、翌年、長野県を走る国道・賤母新道が整備され、両国道が山口で接続すると、新しい道路は完全に一本化され、岐阜と長野を結ぶ新交通文化の第一歩が踏み出されました。

賤母新道は長野県の主要道路七本の内の「第六路線」。長野県読書村から山口を結ぶ国道で、当初は馬籠峠越えを計画していましたが、馬籠峠が急坂で距離も長いことから、賤母深谷に新道を開削することとなりました。

山口便道は従来の馬籠峠へ向かう道路に代えて、岐阜県の落合から現在の落合大橋を渡り落合川沿いに木曾川に出て、木曾川沿いに山口に通ずる国道です。この山口便道の開通により、馬籠を通行する人は絶えて、この区間の中山道は名実ともに幕を降ろしました。

画期的な岡田式渡船を採用

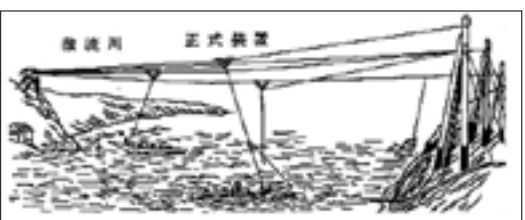
こつした道路の整備により、山口・坂下間で木曾川を渡る黍生渡船も大いに利用され、舟も次第に大型化していきます。明治二四年、これまで個人の営業だった麻生・黍生の渡しは、内務省の許可を得て村営に、明治三八年（一九〇五）には県営となりました。

明治四一年（一九〇八）国鉄中央線の部分開通により坂下駅が営業を開始すると、山口から坂下に向かうため渡船を利用する人はますます増えました。

大正末期に登場した大正丸は長さ一五m、巾二mの大型船。この頃から岡田式渡船が行われるようになり、岡田式渡船とは両岸に丈夫な柱を立て、その間にワイヤ・ロップを張って特殊な滑車で船を繋ぎ、舵によつて流水の力を利用して進む方式です。この方法を採用することにより、増水したときでも安全に川を渡るこができるようになったのです。

古くから山口は対岸の坂下と結びつきが深く、渡船は人々の暮らしに深くかかわっていました。しかし、たん大雨が降り増水すると渡船は中止され、夜間もまた航行されません。したがって無医村だった山口では、急病人が出ても医者がかかれないうなど、不便なことがいろいろとありました。

明治二四年から四一年間、村営または県営の渡船として活躍してきましたが、昭和七年（一九三二）弥栄橋が完成するまでにより、その歴史に幕を降ろし



岡田式渡船(岐阜県史通史編近代下より)

ました。

黍生の木曾川左岸に残る渡船場に至る道の跡や石垣、安全祈願した水神さまなどに、往時の賑わいをしのぶことができます。

長年の悲願を叶えた弥栄橋

木曾川に橋を架けることは山口地区にとって長年の悲願でした。大正二一年（一九三二）当時の山口村の村長は、木曾川水系の配電事業をしていた大同電力株式会社と折衝し、公共事業に相当額の寄付をするとの約束を取りつけました。寄付金は一万円。黍生の渡船場に橋を架けるための費用の一部となりました。以後村は繰り返し繰り返し、岐阜県・長野県に陳情した結果、昭和六年（一九三二）ようやく両県の協議が整い、着工の運びとなりました。同年八月に工事は開始され、昭和七年三月に弥栄橋は完成しました。

幅員は六m。当時としては超一級の鉄橋で、この橋の完成により山口の人々は川止めの不安から開放され、安心して便利な暮らしを過ごすことができるようになった。

祝賀会は五月八日、川止めにあつた無医村の苦しさを涙声で淡々と述べられた当時の山口村の稲葉村長の祝詞に参列者は感激し、すすり泣きの声も聞かれました。

橋柱には島崎藤村の筆になる「いやさかばし」の銅版がはめ込まれました。両

町村がますます栄えることを願い、藤村が橋の名を命名しています。藤村が揮毫した貴重なものですが、戦時中の金属回収で失われました。

新弥栄橋完成

山口の住民の悲願が実り、架橋された弥栄橋ですが、風雪にさらされて老朽化が進むようになり、昭和五五年（一九八〇）には路面がぼろぼろ陥没したこともあり、昭和五七年より通行車両の重量が一〇tに規制されました。

建設当初は主に山口の人々にとって重要なた弥栄橋ですが、道路交通が主体の時代にあつて、右岸の坂下にとっては対岸の国道一九号につながる生命線ともいふべきより重要な橋となつており、大型車に頼る木材業界をはじめ産業・観光に大きな衝撃を与えました。

このため、平成二年度より弥栄橋の架替事業に着手し、平成七年三月には新弥栄橋は完成しました。旧弥栄橋は住民に惜しまれながらも、その役目を終えました。



旧弥栄橋

参考文献  
『山口村誌』上下巻 平成七年  
山口村誌編集委員会













長州藩士治水顕彰碑

市海津町(海津市)は、鹿兒島県分市と姉妹都市として交流が続けられてい

とによる御手伝が二六万両となつてい  
ます。この普請以降、普請金のみを支出  
するお金御手伝へと内容が変化してい  
ます。寛政二一年(一七九九)の津藩な  
ど九藩による御手伝普請で二〇万七千  
八百九一両、次いで最後の御手伝普請  
となつた文久元年(一八六一)において  
は七藩が御手伝を命じられ、費用は一  
六万三千二百六三両でした。

御手伝普請を縁とする  
地域交流

明和以前の御手伝普請においては多  
くの藩士達が、普請に従事するため木  
曾三川流域にきています。厳しい普請の  
中で地域の人々との間に様々な交流が  
はかられたことが想像されます。

四姉妹県と  
して、また、  
海津町(海津市)は、  
鹿兒島県分  
市と姉妹都市  
として交流が  
続けられてい  
ます。

薩摩藩による宝暦治水に対しては、  
油島締切堤の治水神社や宝暦治水碑の  
建立など、宝暦治水顕彰会による活動  
が続いています。また、明和三年の秋藩  
等による明和治水に対しては岐阜市の  
長良川左岸の四ツ屋公園に「長州藩士  
治水顕彰碑」が建立されています。

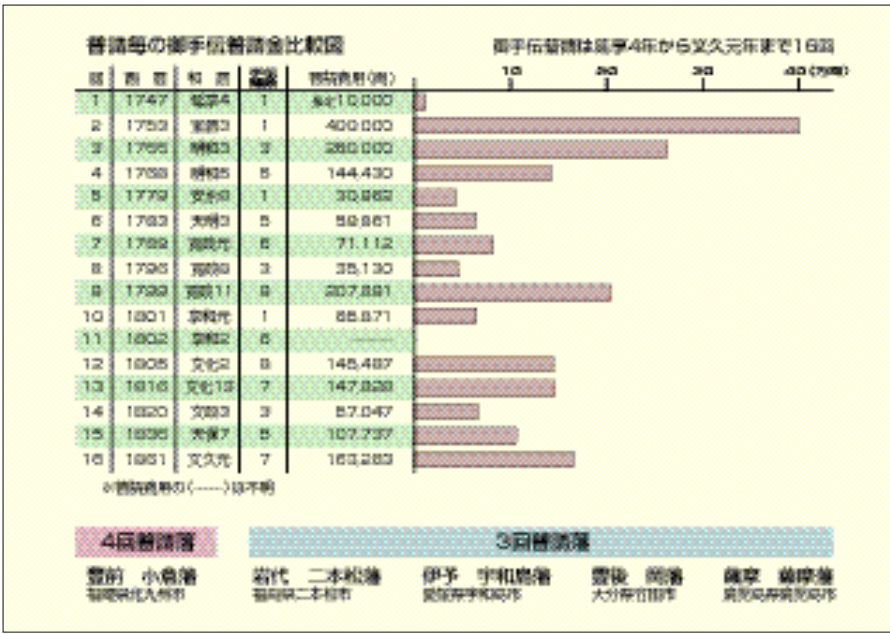
桑名市は江戸時代の藩主の縁で埼玉  
県行田市(忍藩)、福島県白河市(白河  
藩)、新潟県柏崎市(高田藩)との交流が  
続いています。忍藩と高田藩は御手  
伝普請の命を受けた藩です。二本松藩  
が属する福島県には会津藩があり、会  
津藩主松平容保は、高須藩主松平義建  
の六男で、当時の桑名藩主松平正定敬、  
尾張藩主徳川慶勝と兄弟の関係にあり  
ます。



宝暦治水碑

藩名については所在地名を原則と  
していますが、鹿兒島藩は薩摩藩とし  
ています。

一藩単独での  
御手伝普請が四回  
一藩による御手伝普請が異例とされ  
るなかで、木曾川では二本松藩による  
延享四年(一七四七)普請、薩摩藩によ  
る宝暦三年(一七五三)普請、鳥取藩に  
よる安永八年(一七七九)普請、そして  
広島藩、広島県(広島市)による享和元年  
(一八一〇)普請と、一藩単独による普  
請御手伝が実施されています。



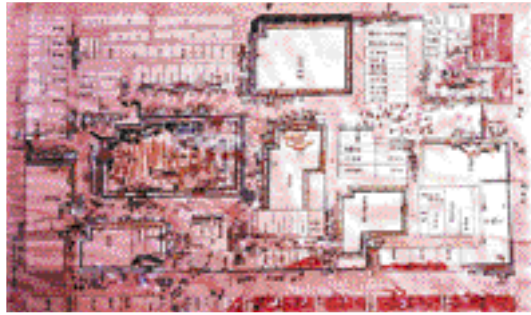
木曾川で初めて複  
数藩による御手伝普  
請が実施されたのは  
明和三年(一七六  
六)の秋藩・小浜藩  
(福井県小浜市)・岩  
国藩(山口県岩国市)  
の三藩による御手伝  
普請でした。

手伝普請を命じられています。そのほか  
九州地方では薩摩藩と岡藩、大分県竹  
田市(が二回)です。木曾川における最初  
の御手伝普請を行った二本松藩は寛政  
元年(一七八九)と寛政八年(一七九六)  
にも御手伝普請を命じられ、御手伝は  
三回に及んでいます。また、宇和島藩、愛  
媛県(宇和島市)も御手伝普請は三回に  
及んでいます。

そのほか一回の普請御手伝を命じられ  
た藩は秋藩など二藩にもほりま。

御手伝普請の時期と御手伝を命じられた藩	御手伝普請の時期	御手伝を命じられた藩	御手伝普請金(両)	御手伝の内容
延享4年(1747)	延享4	二本松藩	84,10,000	御手伝普請100%
	延享4	二本松藩	84,10,000	御手伝普請100%
宝暦3年(1753)	宝暦3	二本松藩	400,000	御手伝普請2%
	宝暦3	二本松藩	400,000	御手伝普請2%
明和3年(1765)	明和3	明和3	280,000	御手伝普請80%
	明和3	明和3	280,000	御手伝普請80%
	明和3	明和3	280,000	御手伝普請80%
	明和3	明和3	280,000	御手伝普請80%
	明和3	明和3	280,000	御手伝普請80%
天明3年(1768)	天明3	天明3	144,430	御手伝普請100%
	天明3	天明3	144,430	御手伝普請100%
	天明3	天明3	144,430	御手伝普請100%
	天明3	天明3	144,430	御手伝普請100%
	天明3	天明3	144,430	御手伝普請100%
天明14年(1769)	天明14	天明14	207,891	御手伝普請100%
	天明14	天明14	207,891	御手伝普請100%
	天明14	天明14	207,891	御手伝普請100%
	天明14	天明14	207,891	御手伝普請100%
	天明14	天明14	207,891	御手伝普請100%
天明13年(1768)	天明13	天明13	71,112	御手伝普請100%
	天明13	天明13	71,112	御手伝普請100%
	天明13	天明13	71,112	御手伝普請100%
	天明13	天明13	71,112	御手伝普請100%
	天明13	天明13	71,112	御手伝普請100%
天明10年(1765)	天明10	天明10	35,130	御手伝普請100%
	天明10	天明10	35,130	御手伝普請100%
	天明10	天明10	35,130	御手伝普請100%
	天明10	天明10	35,130	御手伝普請100%
	天明10	天明10	35,130	御手伝普請100%
天明8年(1763)	天明8	天明8	50,961	御手伝普請100%
	天明8	天明8	50,961	御手伝普請100%
	天明8	天明8	50,961	御手伝普請100%
	天明8	天明8	50,961	御手伝普請100%
	天明8	天明8	50,961	御手伝普請100%
天明2年(1761)	天明2	天明2	100,700	御手伝普請100%
	天明2	天明2	100,700	御手伝普請100%
	天明2	天明2	100,700	御手伝普請100%
	天明2	天明2	100,700	御手伝普請100%
	天明2	天明2	100,700	御手伝普請100%
天明1年(1760)	天明1	天明1	68,871	御手伝普請100%
	天明1	天明1	68,871	御手伝普請100%
	天明1	天明1	68,871	御手伝普請100%
	天明1	天明1	68,871	御手伝普請100%
	天明1	天明1	68,871	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
天明0年(1759)	天明0	天明0	145,487	御手伝普請100%
	天明0	天明0	145,487</	





元治の乱絵図 蛤御門の変 鎮国守神社蔵

桑名藩は、鳥羽・伏見の戦いにおいては敵となり、長州藩と薩摩藩が手を組み新政府軍の先鋒となりました。津藩は戦いの終盤で新政府軍に付いていますが、しかし、西南の役の時には、旧桑名藩士は旧藩主の呼びかけに応じて参集し、政府軍として果敢に戦っています。この功

きますが、近くは津藩や久居藩、遠くは薩摩藩や出羽新庄藩など多くの藩が命じられており、その中で、奇しくも桑名と深く関わる藩があります。まず、桑名藩と親戚関係にあった藩としては、四代目藩主松平定行が移封し、また、その孫で七代目桑名藩主となった松平定重の出身である伊予松山藩があります。移封関連では、一四代桑名藩主松平忠義が移封した勿津藩、初代・二代桑名藩主を務めた本多忠勝の子孫の岡崎藩、七代目藩主松平定重が移封し、後に領地の一部が桑名藩領となった高田藩、長島藩主菅沼定芳が移封した膳所藩があげられます。そして、幕末から明治にかけて桑名と運命的な関わりを持つのが、薩摩藩と長州藩・津藩です。長州征伐・禁門(蛤御門)の変では味方として戦った薩摩藩と桑名藩は、鳥羽・伏見の戦いにおいては敵となり、長州藩と薩摩藩が手を組み新政府軍の先鋒となりました。津藩は戦いの終盤で新政府軍に付いていますが、しかし、西南の役の時には、旧桑名藩士は旧藩主の呼びかけに応じて参集し、政府軍として果敢に戦っています。この功



# 木曾三川の流れとともに

桑名市長 水谷 元氏



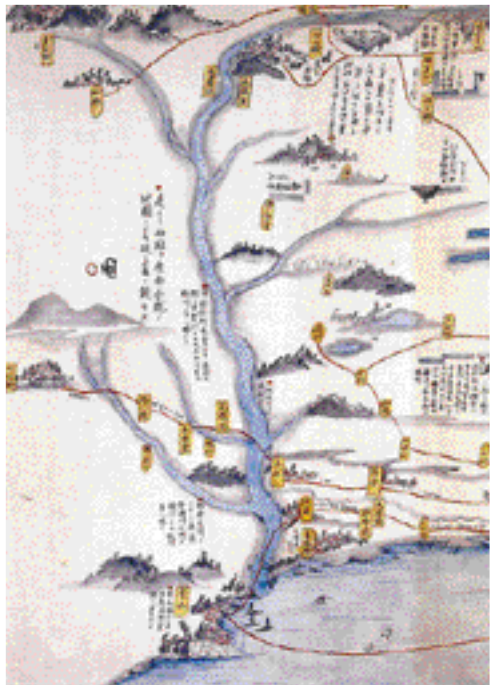
水谷 元氏

略歴  
昭和31年生  
昭和63年11月～平成7年12月  
三重県議会議員(3期)  
平成8年1月～平成16年12月  
桑名市長(3期)  
平成16年12月～  
桑名市長(桑名市・多度町・長島町合併による新市)

## 桑名と水運

桑名は木曾三川とともに歩んできたと言っても過言ではありません。

桑名が日本史上最初に登場するのは『日本書紀』の壬申の乱の時(六七二年)で、桑名に留まっていた大海人皇子は、高市皇子の要請により不破関へ移動したとあります。移動は、即日(その日の内)に行われており、移動手段が、船を利用したという説もあります。ま



六戦國志 古川古松軒作 尾州小牧長久手御合戦地図(桑名博物館蔵)

た、八二二年には、舟運があるので、馬の設置を止めてほしいと朝廷へ訴えています。これらの記述から、木曾三川は早くから舟運が発達していたと推定されます。

桑名は、川舟で運ばれてきた物資を一旦荷揚げし、海船に乗せ替えて各地へ運ぶ拠点となったため、十楽の津と呼ばれ栄えました。江戸時代においても、交通の要衝として東海道の宿駅に指定されました。また、桑名と宮の間は

を認められて、というより、戊辰戦争の時から伝説的になっていた戦上手の立見尚文は、明治政府に取り立てられ、旧薩摩旧長州の軍閥でありながら、陸軍大将となりました。

## 木曾三川地域交流

文政六年(一八二三)桑名藩を震撼させる報せが江戸から早馬でもたらされました。桑名の松平忠義を忍に、忍の阿部正権を白河に、白河の松平定永を桑名に、という国替えの命令でした。江戸中期以降の国替え、まして、三藩間の大掛かりな国替えは異例です。この背景には松平定信があり、彼の強い意向を受けての国替えであったといわれます。

国替えは、藩全体が移動しますので、藩の政策の変換は勿論ですが、風俗・習慣や文化にも新しい息吹が吹き込まれ、住民にとっても大きな変革でした。桑名から移封した(行田市)では今でも、桑名弁が聞かれるように、桑名は白河から藩校立教館の名称立教小学校と教科の一つであった「打毬戯」を伝承しており、漢詩のかるたを取る詩かるたも白河からもたらされたものです。

地理的要件は大きく、生活面や風俗・習慣でも色々な違いがあります。特に言葉のアクセントは川を越えると全く違います。同じ桑名市でも損斐・長良川で隔てられた長島との会話では、「柿のつもりで話していたら相手は、牡蠣だ」と思っているという笑い話がよくあります。

## 木曾三川の縁

木曾三川は、物資だけではなく、人や文化ももたらしました。中世には連歌師宗長や宗硯が全国屈指の湊としての桑名の様子を記した紀行文を残しています。近世には沢庵宗彭・井原西鶴・松尾芭蕉・頼山陽・歌川広重などが俳句・詩歌・小説・浮世絵などに桑名を描いています。そして、『東海道中膝栗毛』で桑名の蛤は全国版となり、『東海道名所図会』や浮世絵で七里



焼蛸(伊勢参宮名所図会)

また、幕末には、美濃高須藩の松平義建の四人の息子が、尾張・会津・桑名に養子に入り、政局を動かす働きをしております。特に京都守護職となつた会津の容保と京都所司代となつた桑名の定敬は、就任以来行動を共にし、戊辰戦争をともに戦っています。



松平定敬(鎮国守神社蔵)

文政の国替えの縁で、桑名市は行田市(勿津藩)・白河市と友好都市締結をして交流を続けており、また、今年には、分領地のあつた柏崎市と防災協定を結び、戊辰戦争の盟友会津とは千川の交換中です。

また、桑名が十楽の津と呼ばれていた中世から今日まで脈々と受け継がれているものに、伊勢神宮の遷宮毎に木曾から切り出される用材の集散と御木曳きがあります。遷宮に必要な用材を切り出す御仙山は室町時代に伊勢から木曾台現在の長野県(と裏木曾、現在の岐阜県)に移りました。切り出された御用材は、木曾川まで運ばれ、一本づつ美濃の錦織まで流され、そこで筏に組まれて桑名まで流れて、内宮用と外宮用に組み分けられて、更に海上を伊勢大湊まで運ばれました。昭和の始めから陸送に替わってまいりましたが、御樋代木だけは出来るだけ古式に則つたという配慮で、木曾谷

から切り出された御樋代木は上松町、大原神社(犬山市)・真清田神社(一宮市)を経て桑名の七里の渡へ運ばれます。岐阜県の裏木曾から切り出された御樋代木は、付知町、錦織(八百津町)を経て運ばれます。そして、七里の渡から桑名宗社まで御木曳きが行われ、内宮用と外宮用に組み分けられます。その後御樋代木は、内宮用は五十鈴川を川曳で、外宮用は護国神社(津市)を経て宮川から陸曳で、奉曳団によって運び込まれます。

芭蕉や山陽は舟で大垣から桑名に下つて名文を残しています。高須などを經由して損斐川を利用するこの航路は明治の改修工事まで健在でした。また、木曾川を笠松まで行くル、長良川を竹ヶ鼻に行くコースなどがありました。長島は大島が主たる川湊で、七里の渡の他、佐屋や桑名や木曾岬などへ渡しが設けられており、流域の交流が活発であったことが推測できます。



末広五十三次「桑名」(桑名博物館蔵)

御樋代木は、御神体を収めるための器に使用する材。



# 天竺の小箱

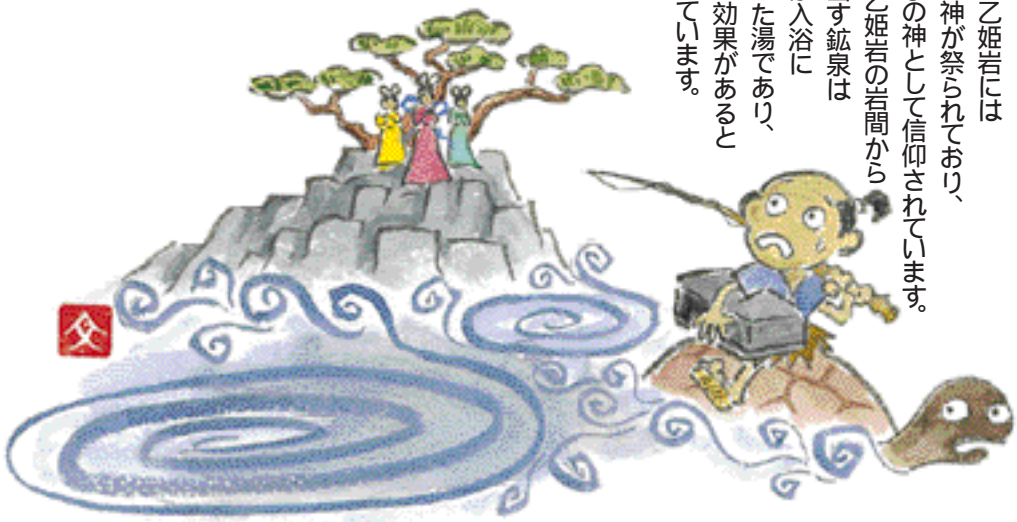
## 竜宮乙姫岩の伝説 中津川市山口

雄大な山々に囲まれ、四季ごとに自然の美しさを見せてくれる山口。木曾川には大小の奇岩怪石が屹立し、大変素晴らしい景観です。中でも一番大きい岩を乙姫岩と呼び、その周囲にはまるで乙姫に仕えるように、殿岩・獅子岩・波切岩・亀岩・振袖岩・伊勢木岩・屏風岩といった岩が川面に浮かび、見る人々の感動を呼んでいます。

ここは変わり、乙姫岩から遙か上流の上松寝覚。木曾川の激流で削られた巨大な花崗岩はとも壮大でまさに自然の彫刻です。そこには浦島太郎が住んでおり、毎日釣りをしていました。ところがある日、大雨が降って川が大増水。岩の上で釣りをしていた太郎は、濁流に吞まれてしまいました。すると不思議なことに岩が生きた亀に変わり、浦島太郎を乗せて乙姫岩まで流れてゆきました。流れ着いた太郎を発見し、介抱したのは乙姫岩に住む乙姫。いつしか、太郎と乙姫は惹かれあってゆきました。しかし、太郎は次第に姫との身分の差に悩むようになり、乙姫を愛するがゆえに別れることを決心しました。太郎が寝覚へ帰る日、乙姫は「また会うときまで、この箱を開けずに待っていてください」と玉手箱を手渡しました。

寝覚に帰った太郎は、乙姫のいない淋しさを紛らわすように暮らしていましたが、ついに我慢ができなくなり、玉手箱を開けてしまいました。すると中から白い煙が立ち上り、太郎は白髪のおじいさんになってしまったのです。その後、太郎と乙姫が会うことは二度とありませんでした。

現在の乙姫岩には乙姫の神が祭られており、縁結びの神として信仰されています。また、乙姫岩の岩間から湧き出す鉱泉は乙姫が入浴に使用した湯であり、万病に効果があると言われています。



## 木曾川文庫利用案内



【開館時間】午前8時30分～午後4時30分  
 【休館日】毎週月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)・年末年始  
 【入館料】無料  
 【交通機関】国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分  
 名神羽島I.Cから車で約30分  
 東名阪長島I.Cから車で約10分

【お問い合わせ】  
 船頭平瀬門管理所・木曾川文庫  
 〒496-0947 愛知県愛西市立田町福原  
 TEL.0567/24-6233



表紙写真 上:木曾川 中左:水車塚 中右:峠の水車 下:乙姫岩と木曾川

### 編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。今号の編集にあたって、中津川市山口・馬籠地区の皆様及び、桑名市長水谷元氏にご協力いただきありがとうございます。お礼申し上げます。今回は、岐阜県郡上市明宝地区を特集します。ご期待ください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ  
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>